# はじめに

## 琉球出土陶瓷研究の重要性

歴史的に「琉球」と呼称された地域については諸説あるが、日本中世では、奄美以南の南島を「琉球」と認識していた。中国の記録に記された「琉球」は、台湾から南西諸島方面と理解されつつも、洪武期には三山が朝貢した沖縄本島を含む地域が「大琉球」と認識されるに至ったと考えられている(大田 2009)。『明実録』においては、洪武 5(1372)年に楊載が詔諭に派遣される国として「琉球国」が記載され、明の人々に地理的な位置が正確に認識されていたかは不明ながら、沖縄は「琉球国」として中国の歴史上に登場する。そして三山の統一により「琉球国」は他称から自国を指す国号となる。琉球国が「沖縄県」になるのは、明治 12(1879)年、明治政府の「琉球処分」と「廃藩置県」以降である。

このため、沖縄県が成立する以前の歴史は「琉球史」であり、本論で主として扱う 14 世紀〜15 世紀にかけての時期は、文献史学の時期区分では「古琉球」と呼称され、考古学では「グスク時代」に該当する(沖縄県教育委員会 2010)。

琉球史を遡れば貝交易を行っていた貝塚時代から、日本あるいは中国からの影響が考えられ(沖縄県教育委員会 2010)、13 世紀後半以降は南宋の滅亡を原因として福建からの対外交易の波が琉球列島に波及し、グスクの成立にも影響を及ぼしたことが想定されている(池田 2019)。元代後期には、日本と元を結ぶ交通路として南島路が顕在化し、それが要因となって明朝に琉球の存在を知らしめ詔諭へとつながったとことが推定されている(榎本 2002)。このように琉球は、常に日本と中国双方からの影響を受けてきたと言え、その原因は琉球の地理的位置による交通や交易においての重要性であり、それは琉球史を形成する外的要因として常に意識されるべき点である。そのような視点により歴史をとらえれば、琉球が最も飛躍的に発展したのは三山から琉球王国にかけての時期であろう。

沖縄本島を含む南西諸島では、概ね 11 世紀後半以降にグスク時代を迎え、その後三山(中山・山南・山北、沖縄では南山、北山と言う場合もある)並立の時期を経て、中山により統一され琉球王国が成立する。三山並立から統一への過程は、同時代資料である『明実録』や『李朝実録』といった海外の正式な記録類、『中山世鑑』『祭鐸本中山世譜』『蔡温本中山世譜』などの琉球側の後世の史書によって論じられ、解釈が異なる部分はあっても、15 世紀初頭には琉球国は中山によって統一されたという見解は一致している(和田 1975)。琉球において三山並立から統一に至る時期は、中国が元朝から明朝へ移行した時期とも重なり、明朝の海禁政策と朝貢制度は、琉球を含めた周辺地域に多大な影響を及ぼしたと考えられている(檀上 2005)。

明朝が周辺国に朝貢を求めたことにより、洪武 5(1372)年には中山王察度が明朝へ入貢し、その後山南(1380 年)、山北(1383 年)も続く。明側の記録によると、琉球の明への朝貢回数

は、14 世紀末から 15 世紀前半にピークを迎え、朝貢国の中では突出する(岡本 1999)。15 世紀初頭に中山が琉球統一を果たすと、王城となった首里城、そしてその港であった那覇は広くアジアを結ぶ中継貿易の中心地となっていく。

朝貢初期の文献によると、洪武 7(1374)年に、明朝は琉球国に李浩を遣わし、中山の察度王に陶器千個を賜与し、同時に琉球において馬を買い上げる対価として、陶器 69500 個を持参したという。李浩は 2 年後に察度の弟である泰期を伴って帰朝した際に、「其の国の俗、市場するに?・綺を貴ばず、但だ磁器・鉄鍋等の物を貴ぶ」と述べている(註 1)。これ以降も回賜と馬の購入には瓷器を用いたという趣旨の記載があるほか、山南王の使節団は、処州まで行って、回賜の銀を瓷器購入に当てている（金沢 2016・松浦 2020)。このような記載からうかがえることは、朝貢開始直後から琉球の人々が中国陶瓷を強く希求する姿である。

その背景については、当初から貿易品として求めたものと推察するが、別に考察する必要があるだろう。重要なことは、結果として多数の中国陶瓷が明代初期以降琉球に運ばれたことである。文献記録からは、さらに琉球から東南アジアなどに運ばれたものが多数あることは判明しているが(註 2)、沖縄県内の遺跡から出土する膨大な陶瓷は、それらを除外しても有り余る量の陶瓷が琉球へともたらされていたことを具体的に示す物証である。掘り出される多種多様な陶瓷には、中国、朝鮮、タイ、ベトナムなど様々な地域の製品があるが、その筆頭はやはり中国陶瓷であり、なかでも龍泉窯青瓷が中心的位置を占める。先に触れたように当該期の琉球の歴史を記した同時代の資料は限られており、その実態を解明するには遺跡の持つ情報を最大限に引き出すことが求められる。龍泉窯青瓷は、その役割を担う中心的な存在の一つであると言える。

文献研究による琉球史から推定して、琉球にもたらされた中国陶瓷の画期が、朝貢開始期である明代初期にあることは想像に難くない。しかし、沖縄県内で出土する多数の龍泉窯青瓷の実際の出土状況は、古いものから新しいものまで混在している場合が多く、時期を特定できる一括資料として出土することは少ない。そのため肝心の明代初期の様相が詳細にはわかっておらず、遺跡出土資料から当該期について明確に論じられないジレンマがある。明代初期は三山の時期と概ね並行する。当該期について語られる歴史は、海外文献資料による断片的な情報と、後世の記録類に立脚したものが主流であり、当時の歴史を最も伝えるはずの多数の遺跡からは地域の歴史を構築するまでに至っていない。つまり琉球史にとって明代初期の陶瓷を明らかにするということは重要な課題である。また、次に続く明代中期の様相も検討し陶瓷の内容を比較することによって、琉球社会を復元する手掛かりが得られるはずである。

一方、陶瓷史にとってもこの問題は非常に大きい。第 1 章の研究史でも触れるが、陶瓷史においては、元から明代にかけての青瓷を「天龍寺青磁」と呼称し、明代の龍泉窯は衰退期と捉えられてきた(小山 1933pp.228-234)。ただし、明代初期には、龍泉窯青瓷が景徳鎮窯とともに宮廷用瓷器の焼造を担っていたことは文献と発掘資料から証明されており、明代龍泉窯青瓷を一括りにして衰退期の製品と評価することはできない。また、評価が低い要因

は、南宋の製品を「砧青磁」として最も高く評価する日本の価値観に依拠している面もあり、嗜好性を反映している評価ともとらえられる。成化年間頃に浙江右参政であった陸容によって記述されたという『菽円雑記』には、同時代の龍泉窯について「凡そ緑荳色にして瑩淨、瑕無き者を上と爲す。生菜色なる者之に次ぐ。然れども上等は價高く、皆他處に轉貨し、縣官も未だ嘗て見ず。」と記載されている（註 3)。明代中期に至っても高級な青瓷が生産されていたことを示す重要な記事であり、そのように認識されていた製品とは実際にどのようなものを指しているのか検討する余地がある。

龍泉窯青瓷のうち特に大形品等は、元代か明代かさえ研究者により意見が一致していない現状がある。それは、製品の特徴を見抜き、時期判断の客観的根拠を示すことができていないことにほかならない。その要因は、元～明代の龍泉窯青瓷大形品の編年ができていないことにある。しかし、沖縄出土の中国陶瓷には、確実にそれらを含んでおり、そして何より、首里城跡京の内跡倉庫跡 SK01(沖縄県教育委員会 1998)と二階殿地区落ち込み(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)という明代中期を下限とする世界でも稀有な一括資料を有している。これらの資料を分析することによって、個々の製品の持つ特徴を示し、根拠を持って正面から論じることが求められており、それは資料が豊富な琉球出土陶瓷でこそ為し得る研究である。

明代後期から晩期、また清代に至って、龍泉窯青瓷が一地方窯に衰退していくことを否定はしないが、そこに至る過程はより丁寧に検証すべきであろう。その意味においても、琉球出土龍泉窯青瓷は重要な資料群として評価できるのである。

美術史と考古学

さて、本論において主に対象とするのは「琉球出土」の龍泉窯青瓷であり、改めて確認するまでもなく遺跡の発掘調査において出土した考古資料である。しかし、そもそも陶瓷史研究は、美術史と考古学双方から論じられてきた分かち難い分野である。

日本における陶瓷史の成立については、木田拓也の論に詳しくまとめられており(木田 2013)、近代以降、殖産産業や博物館の設立、あるいは旧大名家などの売立によって顕在化する「近代数寄者」のコレクション成立と不可分であり、明治末から大正時代にかけて成立した「品陶会」「陶磁器研究会」を経て「彩壺会」へと至り、「「鑑賞陶器」を土台として、「東洋陶磁史」を学問領域のひとつとして確立した」(木田 2013p.30)過程が明らかにされている。明治末から大正時代には「陶磁器研究会」のメンバーにより窯跡の発掘(窯跡での採集)が行われ、陶瓷史の研究における実証的な方法として当初から発掘が取り入れられていたことがわかる。また、日本における中国青瓷研究の軌跡について、最古の博物館である東京国立博物館の所蔵品の形成とともに論じた三笠景子の成果（三笠 2019）によれば、初期に博物館で収集された中国陶瓷には「青磁刻花牡丹唐草文大瓶」のような大形品もあるが、維新後に寺社から流出したとみられる製品が目立つ。日本では、中国陶瓷を長きにわたって受け入れてきた歴史があり、中世末以降、茶の湯の発展に伴って独自の用途での使用や鑑賞

が行われてきた。その製品が、現代まで伝わっていれば寺宝や美術館の収蔵品となり、主として美術史において研究され、歴史の過程において何らかの要因で地中に埋まれば考古資料となる。日本の考古学の基礎を築いた濱田耕作は、考古学と美術史双方について方法論を論じており、相違点も認めながらも、「美術考古学」と呼ばれる研究法についても述べているとされる(時枝 2021)。また、青瓷研究の初期の論文は『考古学雑誌』に掲載されており、美術史としての陶瓷史と考古学は学問分野として隔てられることなく、一体となって発展してきたことを示している。

両者が区別されるようになったのは、むしろ近年、日本において発掘調査件数が飛躍的に増加した 20 世紀後葉以降である。考古学の対象が、遺跡から多量に出土する碗・皿などの普及品中心となったことが大きい要因と考えられ、主たる研究対象が博物館や美術館に収められた大形品や寺社に伝来した一級品などである美術史とは切り離されていった。

本論で対象とする龍泉窯青瓷は、個別の作家が製作した作品ではなく、総体としての窯、あるいは工房という集団が生み出した製品である。そのようなものを対象に研究する場合、美術史と考古学の垣根はいっそう低い。陶瓷史の研究には、陶瓷の鑑賞や評価以外にも、生産、技術、流通などの側面があり、さらに各生産地や窯業技術、材料の分析などの理化学的な方法も加わって内容は細分化されている。そして、これらの研究は、美術史と考古学では共通する要素である。本論においても、用いる資料はほぼ遺跡から出土した考古資料であるが、比較資料では美術館等の所蔵品を使用する。陶瓷史において「天龍寺青磁」として一括りにされてきた元から明代の龍泉窯青瓷について、出土状況の分析や分類を客観的に行い、より詳細に編年を行い、特徴を抽出して、美術史と考古学双方に寄与することを目指したい。

本論の課題と構成

以上、琉球出土青瓷研究の重要性と、美術史と考古学における本論の立場について述べてきた。論点は多岐に及ぶが、本論で論じる課題は二つに集約できる。一つは、龍泉窯青瓷の編年である。沖縄出土資料からは、明代初期の様相を明らかにするという点が重要であり、対象とする時期は、その前後も含めて 14 世紀から 15 世紀とする。その際に、特に大形品については、1 点 1 点の製品が有する特徴を丁寧に観察しながら特徴を導き出すことを行いたい。二つ目は、編年研究から派生して生じる美術史と考古学双方における課題である。美術史については明代龍泉窯青瓷の特徴について今一度検討し、考古学では、陶瓷を分析することによりみえてくる琉球社会や遺跡の特徴、周辺への影響について言及したい。

これらの課題について論じるため、本論は以下の構成とする。

第 1 章　研究史と課題
第 2 章　龍泉窯青瓷碗・皿・盤の編年
第 3 章　龍泉窯青瓷蓋罐の研究－出土資料を中心に－
第 4 章　もうひとつの蓋罐－龍泉窯青瓷鳥文蓋罐をめぐって－
第 5 章　首里城跡出土龍泉窯青瓷大瓶の編年研究

第 6 章　明代龍泉窯青瓷の特徴
第 7 章　明代龍泉窯青瓷からみた琉球の内外

最後に、本論の中で使用する用語と時期区分について触れておく。

すでに使用しているように、「陶磁器」を示す用語として「陶瓷」を用いる。瓷器(磁器)を扱う場合に、「磁」と「瓷」を使用する場合があるが、日本においては平安時代に「青瓷」「白瓷」が国産の緑釉陶器を指したことが明らかにされており(亀井 1975)、それとの区別が問題にされる場合がある。しかし、それらは平安時代に限られた用語であり、例えば「青瓷」は、中世になると中国産の青瓷に対しても用いられるようになり(註 4)、「青磁」「青瓷」双方が用いられながら現代に至っている。本論では龍泉窯青瓷を対象にしているため、それが国産陶器と誤解を受けることはないであろう。現在、どちらを使用するのかは著者や編集者の考えによるが、「磁器」は「磁州窯の器」を指す場合があること、中国の「瓷器」は胎土のガラス化にかかわらず釉薬がかかり高火度焼成しているものを全て含み、日本で用いる「磁器」とは違いがあることが指摘されている(出川 2019)。筆者は、「瓷」が正字であり特に中国の出土資料を扱う場合に「中国と同じ表記」が望ましいとするという意見(亀井 2009pp.104・105)に従い使用している。ただし、器種名については、できる限り中国と共通の用語を使用したいと考えたが、中国においても統一されている訳ではないため、中国名も参照としながら一般的で平易な器種名を使用した。

地名については、地理的な位置を示すため現在の呼称で示すことがふさわしい場合には、「沖縄」「沖縄県」「久米島町」などの行政区分や現在の地名を使用する。また、歴史的に示す必要がある場合には「琉球」「琉球国」「中山」「山南」「山北」など、同時代の資料に基づいた名称を使用する。

時期区分は、「グスク時代」「古琉球」という琉球史に基づいた用語は解説に必要な場合のみ使用し、「元代中期」、「明代初期(明初)」などの中国の時期区分と西暦による年代を使用する。これについては以下の通りとする。

元代中期(14 世紀前葉)
元代後期(14 世紀中葉)
明代初期（14 世紀後葉～15 世紀前葉)
明代中期(15 世紀中葉～16 世紀初頭)
明代後期(16 世紀中葉～16 世紀後葉)
明代末期(16 世紀末～17 世紀初頭)

14 世紀中葉から後半を中心とする時期について、元代か明代か明確に示すことができない場合には、「元末明初」と表現する。また、上記の時期区分の中で、より時期を限って示す場合、「明代中期前半」などを使用する。

註

1 『太祖実録』巻九十五洪武七年十二月乙卯の条および洪武九年四月甲申の条。『明実録』

については和
　田久徳ほか編 2001 を参照した。
2　『歴代宝案』に残る暹羅国王宛の咨文ほか、各事例については分析された成果があり(内田ほか
　2009)、また記載された青瓷を一覧とし、内容を検討した成果により(亀井 1997)、琉球経由で持ち出　された中国陶瓷の量が膨大であったことがわかる。
3 陸容撰『菽円雑記』巻十四。読み下しは小山 1933p.252 を引用した。
4 例として、中厳円月『東海一?集』巻四、満済『満済准后日記』などが挙げられる。

参考文献

池田榮史 2019「琉球列島史を掘り起こす－十一～十四世紀の移住・交易と社会的変容－」中世学研究会編『琉球の中世』高志書院 pp.13-37
内田晶子・高瀬恭子・池谷望子 2009『アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－』榕樹書林
榎本渉 2002「元末内乱期の日元交通」『東洋学報』第 84 巻第 1 号　東洋文庫 pp.1-31
大田由紀夫 2009「ふたつの「琉球」－13・14 世紀の東アジアにおける「琉球」認識－」木下尚子編『13～14 世紀の琉球と福建』熊本大学文学部 pp.201-218
岡本弘道 1999「明朝における朝貢国琉球の位置附けとその変化－一四・一五世紀を中心に－」『東洋史研究』第 57 巻第 4 号　東洋史研究会　pp.1-35
沖縄県教育委員会 1998『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－』
沖縄県教育委員会 2010『沖縄県史　各論編　第三巻　古琉球』
沖縄県立埋蔵文化財センター2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』
亀井明?1986「初期輸入陶磁器の名称と実態」『日本貿易陶磁史の研究』同朋社出版 pp.94-114(初出 1975「平安期輸入陶磁器の名称と実態」『考古学雑誌』61 巻 1 号 pp.31-48)
亀井明?1997「琉球陶磁貿易の構造的理解」『専修人文論集』60 専修大学学会 pp.41-66
亀井明?2009「日本出土の元青花瓷の諸問題」『亜州古陶瓷研究Ⅳ』亜州古陶瓷研究会 pp.75-107
金沢　陽 2016「明前期貢舶貿易における附搭貨物交易と陶磁器輸入の関係について－琉球列島出土中国陶磁の調査成果から－」『青山考古』第 31・32 号合併号　青山考古学会 pp.89-99
木田拓也 2013「大河内正敏と奥田誠一　陶磁器研究会/彩壺会/東洋陶磁研究所－大正期を中心に－」『東洋陶磁』VOL.42 pp.15-35
小山冨士夫 1933『支那青磁史稿』文中堂
檀上　寛 2005「明代「海禁」の実像－海禁＝朝貢システムの創設とその展開」歴史学研究会編『港町と海域世界』青木書店 pp.145-177
出川哲朗 2019「監訳者序文」葉?民著・出川哲朗監訳・徳留大輔・新井崇之訳『中国陶磁史』

科学出版社
時枝務 2021「濱田耕作の美術史と考古学」『美術史と考古学』雄山閣 pp.25-30
松浦章 2020「明代中国から海外諸国へわたった陶磁器」『中近世陶磁器の考古学』第 12 巻 雄山閣 pp.9-30
三笠景子 2019「東京国立博物館の中国青磁コレクションと研究動向について」『東京国立博物館紀要』 第 54 号
和田久?1975「琉球国の三山統一についての新考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 28 巻 pp.13-39
和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編 2001『『明実録』の琉球資料（一)』(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室

以下、各章の目的と成果、課題を簡潔に述べる。

第 1 章「研究史と課題」では、研究史を辿り課題を抽出することを目的とした。前半では、日本考古学と美術史における 14～16 世紀の中国陶瓷編年研究の概要をまとめ、後半では、龍泉窯青瓷の碗・皿類を中心とした編年と、大形品の編年において課題となる点を指摘した。

中国陶瓷編年研究では、精緻な発掘調査により多くの出土資料が得られている考古学の成果の有効性は認められる。しかし、日本における中国陶瓷編年研究では、国内の消費地遺跡から出土する限られた資料を細分することに注力してきた経緯があり、その方法では中国陶瓷の全貌から乖離するおそれがある点を指摘し、生産地である中国や海外出土資料も取り上げて全体像を意識して研究を進めることが重要である点を強調した。

これまで行われた龍泉窯青瓷碗・皿の編年では、第一の課題として元代中～後期(14 世紀前葉～中葉)の分類と編年が十分に検討されていないこと、第二の課題として、琉球においては明代中期(15 世紀中葉)の基準資料は充実しているが、明代初期(14 世紀後葉～15 世紀前葉)の基準資料が欠落していることを挙げ、それと関連して、沖縄での分類と編年研究の課題を第三の課題として整理した。つまり、14 世紀にはⅣ類、15 世紀にはⅤ類が中心となることが明らかにされてきたが、同分類の中での微細な変化や、両者の中間的な特徴を有する製品の分類と位置づけが課題であり、明代初期から中期に至る製品の組み合わせと時期を再検討する必要があることを述べた。また、編年研究ではほとんど対象とされてこなかった大形品は、元・明代のものを「天龍寺青磁」と呼称し、元代か明代かさえ区別できない製品があり、具体的に根拠を示しつつ編年を行う重要性を強調した。

第 2 章「龍泉窯青瓷碗・皿・盤の編年」では、遺跡出土の碗・皿・盤を対象に、前章で課題とした元代中期(14 世紀前葉)から明代中期(15 世紀中葉)の編年を行った。当該期最大の基準資料として、元代中期の新安沈船と明代中期の首里城跡京の内跡倉庫跡 SK01 を挙げ、両者と年代が一致する資料や、あるいはその間に位置付けられる基準資料について具体的

に観察しながら特徴を詳らかにした。また、紀年銘資料や一括出土などの基準資料だけではなく、製品の特徴から明代初期と推定される資料を検討した。方法としては、これまでの研究により設定されたⅢ・Ⅳ・Ⅴ類という分類に従って、器形や文様の変化を観察し、高台や施釉にも注目しつつ時期変遷を追った。また、生産地である龍泉窯での編年も参照し検証を行った。

その結果、元代中期にはⅢ類(いわゆる砧青磁)はほとんどなく、角高台と高台内露胎を主な特徴とするⅣ類が中心となっており、元代後期には、微細ではあるがⅣ類の器形や施釉に変化がみられることを示した。そしてそれらの変化の方向性は、明代につながるものであることを指摘した。また、明代初期には無文外反碗を中心に、文様が簡素で、粗雑なものが多数あり、これらの多くはⅣ類ではあるが典型的ではなく、Ⅴ類との中間的な特徴を持つものも含まれ、龍泉窯でも竹口窯などの周辺窯の製品である可能性を示唆した。そして、明代初期後半(15 世紀初頭以降)に、緑色の厚い釉薬を全面に施したⅤ類が登場することにより、Ⅳ類の中間的なものにⅤ類が加わる形で徐々に様相が変化し、明代中期にはⅤ類が盛期となり、器形が大きく変化し、文様が多様になり、加飾性が増していくことを明らかにした。

第 3 章「龍泉窯青瓷蓋罐の研究－出土資料を中心に－」では、「酒海壺」と呼称される蓋罐の編年を行った。まず、Ⅰ類を蓮弁文、Ⅱ類を無文、Ⅲ類を文様帯、Ⅳ類をその他とする文様による大分類を設定し、基準資料の観察を通して、各分類の出現時期や、形態の変遷を示した。

その結果、南宋(13 世紀中葉)のⅡ類が大形の青瓷蓋罐の初源であること、元代中期(14 世紀前葉)にはⅠ～Ⅲ類の器形の統一がみられ、蓋罐の量産化が想定できることを述べた。明代中期(15 世紀中葉)にはⅢ類が盛行し、口径の大型化や口縁部の簡略化、文様の多様化が認められることを示した。さらに、首里城跡や今帰仁城跡で出土する一部の製品には、元代と明代中期の中間的な特徴を持つものがあり、明代初期に遡る可能性を指摘した。課題として、明代初期の確実な資料の欠落や、より多くの資料を用いた編年の検証、遺跡内や地域における評価、日本のみならず広く世界に視野を広げて類例を求めることなどを挙げた。

第 4 章「もう一つの蓋罐－龍泉窯青瓷鳥文蓋罐をめぐって－」では、久米島の宇江城城跡から出土した鳥文蓋罐の評価を行った。まず、同一個体と推定できる破片を実測し、器形を復元した。その結果、本例は盤口の蓋罐で、故宮博物院蔵品など少数しか類例のない希少な製品であることが明らかとなった。また、鳥文や副文の特徴から、時期は明代中期(15 世紀中葉)に位置付けられると結論した。類例を追う過程で、同時期の製品には刻花文を深く刻み、文様を立体的に表現する製品が存在することを示し、さらに鳥文蓋罐の文様の特徴は、同時期の景徳鎮窯とも共通することを述べ、その背景は課題とした。

第 5 章「首里城跡出土龍泉窯青瓷大瓶の編年研究」では、龍泉窯青瓷大瓶の編年研究を行い、首里城跡から出土した 8 点の大瓶を編年的に位置付けた。年代的に基準となる資料の特徴を観察して編年を行った結果、大瓶は南宋以降確認でき、元代には貼花文と刻花文があり、両者では標準的な器形や文様構成が異なることを述べた。また、明代には刻花文が盛行

し、脚部に突帯が付く器形となり、それに加えて、頸部圏線、牡丹文の特徴、接合方法を検討し、これらにも時期的変遷が認められることを明らかにした。
首里城跡出土の大瓶を編年に該当させると、全て明代の製品であり、明代初期の可能性のあるものを含み、明代中期前半までに位置付けられることを示した。明代中期後半以降の大瓶は基準資料の欠落から概要を示すにとどめ、他の大形器種との比較検討も含めて課題とした。

第 6 章「明代龍泉窯青瓷の特徴」では、第 2〜5 章で論じた編年を総合し、まず、明代初期には一般的な碗・皿・盤では簡素化や粗雑化という特徴があり、明代中期前半には、小形品から大形品まで加飾化や多様化がみられ、明代初期とは相反する特徴があることを述べた。しかし、15 世紀前葉の資料を多く含む首里城跡二階殿地区落ち込み資料には、編年に反映されていない特殊な製品が多く認められ、これらの製品が、明代初期と明代中期の相反する特徴の要因を探る手がかりとなると考えた。

編年に反映できなかった特殊な碗や鉢の類例を探すと、一部は洪武官器、多くは永楽官器に共通する特徴が認められることが確認でき、明代初期後半(15 世紀前葉)に位置付けられると推定した。また、同じく首里城跡二階殿地区落ち込みからは長胴罐がまとまって出土するが、年代の明らかな類例がないため、編年を行った大瓶や蓋罐と比較し、明代初期から中期への過渡的な様相が認められることを指摘した。

これらの検討から、明代初期には、一般的な製品には簡素化や粗雑化という特徴があるものの、官器と類似する特殊な製品も存在し、琉球には双方がもたらされていることを述べた。そして、一般の製品と上質の製品ともに文様の加飾化や多様化という共通性が認められる明代中期は、両者の境界が大きくなくなり、融合していった結果であると推論した。さらに、明代中期にみられる立体的な刻花文の製品は、明代龍泉窯青瓷の最上級品の一つであると評価でき、一部の印花文の製品にも同様の評価ができることを論じた。

明代初期から明代中期の製品の変化の背景には、官器生産体制の変化と民窯の隆盛があると推定できるが、窯業以外の中国社会の文化的流行なども検討する必要がある。また、景徳鎮窯での?龍泉窯の生産との関連も検討課題として挙げた。

第 7 章「明代龍泉窯青瓷からみた琉球の内外」では、琉球における陶瓷出土の画期、琉球内での大形品所有の特徴、琉球から他地域への影響について論じた。琉球での中国陶瓷出土の画期は 14 世紀後葉から 15 世紀前葉の明代初期にあり、当該期に出土量が激増することを述べた。しかし、大形品である酒海壺型蓋罐は明代初期にも出土するが、大多数はそれ以降、明代中期前半にもたらされ受容されており、集落から王城まで重層的な所有となることを述べた。この傾向は、中国や東南アジアでは現時点で確認できず、琉球独自の特徴である可能性が高いことを指摘した。

また、琉球における陶瓷出土の画期は、それまで貿易の窓口として圧倒的な出土量を誇っていた博多での陶瓷出土減少期に当たり、日本における南九州から瀬戸内の遺跡の様相から、琉球からの影響によって九州東岸ルートの顕在化など貿易陶瓷の流通ルートが多様化

したことを述べた。

以上のように、本論では龍泉窯青瓷の編年を中心に論じた。器種ごとに編年を示すことができたことは重要な成果であり、今後の龍泉窯青瓷研究に役立つものと確信している。その中でも特に重要な成果として、碗・皿・盤において、元代中期から後期にかけての変化をとらえ、それが明代へとつながる方向性を持つことを示した点、さらに簡素な製品が多数みられる明代初期と加飾性と多様性の増す明代中期の相反する傾向性を明らかにした点、その傾向を生み出す背景は一般的な製品と特殊な製品の二極化とも言える乖離があり、その後の一体化の結果であることを推定した点、さらに、これまで元代龍泉窯青瓷と誤解されがちであった加飾が著しい優れた製品は明代中期に生産されており、「天竜寺青磁」の最上級品は明代中期に位置付けられるものが存在することを示した点などが挙げられる。また、明代初期の簡素な製品の多くが龍泉窯の中でも竹口窯など、福建寄りの周辺窯の製品である可能性があることは、琉球への明代初期の製品の流通を考察する上で重要な問題であり、一層追求すべき点である。

基礎となる編年を検討したことによって、琉球の中での大形品分布の特徴を時期を追って示し、その受容の過程を考察することができ、また、琉球にとって最大の画期である明代初期に、琉球からの貿易品の輸送ルートが九州以北にも影響を与えていることについても論じることが可能となった。未だ取り上げていない器種の編年や、青花瓷との関係は今後の課題とする。

本書の各章を構成する論文には、既に公表したものを含んでおり、ここで初出をまとめておく。ただし、本書に所収の各章では、いずれも追加および修正を加えており、大幅な改変を行ったものもあることを断っておく。

第 1 章第 1 節　「中世後期における貿易陶磁器研究の現状と展望」『第 35 回中世土器研究会　貿易陶磁器研究の現状と土器研究』日本中世土器研究会　2017 年　pp.11-28

第 3 章　「龍泉窯青瓷蓋罐の研究－出土資料を中心に－」『東洋陶磁』第 48 号　東洋陶磁学会　2019 年 pp.93-119

第 4 章　「宇江城城跡出土　龍泉窯青瓷鳥文蓋罐について」『久米島博物館研究紀要』第 20 号　2020 年　久米島博物館 pp.1-8

第 5 章　「首里城跡出土龍泉窯青瓷大瓶の編年研究」『貿易陶磁研究』No.41 日本貿易陶磁研究会　2021 年　pp.1-21

第 7 章第 2 節　「琉球における龍泉窯青瓷酒海壺型蓋罐」『中近世陶磁器の考古学』第 15 巻　雄山閣　2021 年　pp.49-71

第 7 章第 3 節　「消費地遺跡からみた元末明初中国陶瓷の受容と流通」『貿易陶磁研究』No.37 日本貿易陶磁研究会　2017 年　pp.54-73

最後に、琉球出土資料の可能性について強調しておきたい。

はじめに述べたように、琉球の遺跡出土の龍泉窯青瓷は、世界でも稀有な資料群であり、本書で論じた多くの内容は琉球出土資料の存在によって成し得たことである。そして、その出土の中心が明代である点も重要である。明代龍泉窯青瓷の中でも明代初期から中期は、これまで評価されてきた衰退期というイメージを払拭しつつあり、生産地における龍泉大窯楓洞岩窯址の発掘調査と琉球における出土資料が、その立証の原動力であることは間違いない。いわば、明代龍泉窯青瓷の実像を表す両輪として両資料は評価でき、その分析を通じて、明代に至っても龍泉窯が優れた製品を生み出していたことを証明し、これまでの価値観に転換を促すことが可能となった。

本書では編年を重視し、形態や釉薬、文様等の変化について、細かく観察し、製品の変化を明らかにすることに主眼をおいた。 製品の変化には背景があり、製品を生み出した工房や工人たちの創意工夫のみならず、製品の生産体制や原材料の供給、中国社会における要請や文化的流行、さらには海外の消費地における需要など、社会からの多様な影響が存在している。編年はいわばそれらを映す鏡である。裏を返せば、製品の変化からは、その背景を読み解いて行くことも求められる。

また、編年を行うことは、遺跡に明確な時間軸を与えることとなり、社会の復元に貢献できる。琉球社会を例にすれば、明代初期の無文外反碗が大量に出土している遺跡として、本書で取り上げた今帰仁城跡、越来城跡、宇江城城跡のほか、浦添城跡なども挙げることができる。明代初期に大量にもたらされる製品が粗製の無文外反碗である背景についても追求すべき課題だが、それらが大量に出土する遺跡は、明代初期前半、つまり琉球史における三山並立期に中心的な消費地として機能していたことを示している。そのような遺跡を抽出して、琉球史の中でどういった位置付けを与えていくのかは、後世の記録に直結させるのではなく、まず遺跡から得られる情報について精査する必要があることは論を待たない。そのためには、遺構の検討はもちろん、陶瓷研究をより一層進めておくことがますます重要となる。また、久米島で最高所に立地する宇江城城跡は、明代初期の龍泉窯青瓷が最もまとまって出土する遺跡であるとともに、明代中期前半においても鳥文蓋罐のような優品がもたらされているが、その後の製品は激減する。このことは、明代初期から中期前半において当該遺跡が重要な役割を担っていたことを示唆しており、その立地から航路と関連することが予測できる。明代初期後半から明代中期(15 世紀前葉～中葉)は、琉球において様々な変化が見られる時期であり、三山の統一はもちろんだが、首里と那覇の一体化が進められ、那覇港の本格的な整備も行われていく。そのような背景の中での久米島の役割を考えるべきであろう。さらに、本書で火災層の検討を通じて論じた首里城跡の内部での変遷についても課題であり、陶瓷と遺構を合わせて論じていく必要がある。本書で行った編年研究は、そのもっとも基礎的な部分である。

ここでは、今後の研究の展望として若干の課題を述べるにとどめるが、これらのことは、琉球出土の龍泉窯青瓷を研究することが、琉球社会の復元に貢献することができる可能性を十分に示している。未だ初歩的な一歩を踏み出したに過ぎないが、琉球出土資料の無限の

可能性を信じて、今後も課題に取り組んでいきたい。